同志社女子大学生活科学　*Vol*. 49，1～9（2015）

≪原著論文≫

家庭生活における女性の手仕事の変遷
――雑誌「暮らしの手帖」記事調査を中心として――

Change of Women's Handwork in Family Life : Focus on Researching *Kurashi-no-Techo*

青　木　　藍
（Ai AOKI）

Abstract : The purpose of this study is to clarify change of Japanese women's handwork performed at home. I investigate articles of a magazine named *Kurashi-no-Techo* published from 1948 to 2014 from viewpoint of handwork. Also, I discuss ethical consumption. The results show that change of women's handwork is related to the spread of western clothes and ready-made clothes after World War II. During a period from 1945 to 1969, women learned dressmaking for family life and dealt with the spread of Western clothes by handcrafting clothes. When ready-made clothes came to be easily available by establishment of the apparel industry, people stopped handcrafting clothes, and it became natural to buy them in a shop. We can see such a change in *Kurashi-no-Techo*. For example, while for several years just after the war, *Kurashi-no-Techo* often featured "chokusen dachi", which is practical for dressmaking, now in 2014, it featured decorative embroidery, which is not so much practical for dressmaking. Thus, women's handwork reflects social conditions and changed from a housework-like thing into a hobby-like thing. Due to the Great East Japan Earthquake, the consumption awareness of Japan changed from consumption for the selfish satisfaction to consumption for the ethical satisfaction. I feel that this change brings new value for future handwork.

Key words : ready-made clothes, ethical consumption, *Kurashi-no-Techo*

1. はじめに

家庭生活でおこなう手仕事は，時代の移り変わりとともに変化している。衣服は作るものから買うものへと変わり，衣服を作ることで家族の衣生活を支えてきた女性たちは，手仕事に新たな価値を求めるようになった。この変化の背景と要因，ならびにその変遷を明らかにしていきたい。

主な調査方法は，第二次大戦敗戦後まもなく創刊された暮しの手帖社発行の「美しい暮しの手帖」（1948 年～）とその後継誌「暮しの手帖」（1953 年～）に掲載された記事調査である。

同志社女子大学生活科学部 2014 年度卒業生

2.「暮しの手帖」掲載記事の変遷

2.1　調査概要

調査対象誌は暮しの手帖社発行の雑誌「美しい暮しの手帖」と「暮しの手帖」である。「美しい暮しの手帖」は 1948 年に暮しの手帖社が創刊し 1953 年に「暮しの手帖」へと雑誌名を変更した。創刊から衣食住を中心にした生活に関わる記事を掲載し，人々から支持を受けて現

在も発行を続けている。津野海太郎は『花森安治伝　日本の暮しを変えた男』2013[1]で「実売部数で百万部をこえる「新しい国民雑誌」と呼ばれるまでの影響力をもつにいたった」と述べている。人々の生活は社会状況によって変化しており，これは生活を営むための手仕事にも変化を与えた。そこで社会状況を反映した雑誌の記事を調べれば，手仕事の変遷を明らかにできると考えた。

調査対象期間は，図 1 に示した「美しい暮しの手帖」1 号（1948 年 9 月 20 日発行）から，図 2 に示した「暮しの手帖　第 4 世紀」71 号（2014 年 7 月 25 日発行）までの計 371 冊である。次の 3 要件を満たすものを，裁縫や手芸に関する記事であると判定して調査対象記事とした。

（1）衣服やアクセサリーなど身装品に関する記事であること

（2）材料に布や糸を使うものであること

（3）作り方の記載があること

図 1　「美しい暮しの手帖」1 号（1948 年 9 月 20 日発行）暮しの手帖社 HP より[2]

図 2　「暮しの手帖　第 4 世紀」71 号（2014 年 7 月 25 日発行）暮しの手帖社 HP より[3]

2.2　記事数・ページ数の変化

現在「暮しの手帖」は隔月刊である。本論では 1 年分を集計してその推移を追うものとする。調査対象となった記事は 312 件，対象記事のページ数合計は 1887 ページであった。表 1 は 1 号あたりの平均記事数・ページ数を年ごとにまとめたものである。参考のため 1 号あたりの総ページ数を併記した。また総ページ数に占める対象記事数・ページ数の割合を年ごとにグラフにしたものを図 3 と図 4 にそれぞれ示した。

表 1　1 号あたりの平均記事数・ページ数

年	記事数（件）	ページ数（ページ）	全ページ数（ページ）
1948	5	14	106
1949	4.8	15	134
1950	2.8	10	160
1951	0.5	2.8	193
1952	0.8	3.5	196
1953	1	3	201
1954	1.5	6.8	202
1955	1.3	8.8	212
1956	1.2	7.2	225
1957	0.8	2.8	236
1958	1.6	6.8	236
1959	0.6	3	236
1960	0.6	2.8	236
1961	1	5.6	236
1962	1.4	8	236
1963	1.2	6.4	236
1964	0.8	3.8	236
1965	0.8	5	236
1966	0.8	4.4	236
1967	0.4	4	236
1968	0.5	3.7	236
1969	0.4	1.6	225
1970	0.3	1.3	220
1971	0.7	5	220
1972	0.5	2.2	220
1973	0.3	2	220

1974	0.5	3.3	204
1975	0.7	4	207
1976	0.7	3.3	208
1977	1	4.8	208
1978	0.5	3.3	208
1979	0.3	1.3	208
1980	0.5	3.3	208
1981	1.3	7.5	204
1982	0.5	2.7	204
1983	0.7	6.2	204
1984	0.7	2.7	204
1985	0.5	4.2	204
1986	0.8	5	204
1987	0.8	5.7	204
1988	1	7.5	204
1989	0.8	5.3	204
1990	0.7	3.3	204
1991	0.7	5	204
1992	1	6	204
1993	0.8	5.8	204
1994	0.8	4.2	204
1995	0.5	1.7	204
1996	0.7	3.5	204
1997	0.8	3.2	204
1998	0.5	2.3	207
1999	0.5	3	204
2000	0.2	0.7	204
2001	0.5	2.5	204
2002	0.2	1.3	199
2003	1	7	179
2004	1	8	185
2005	0.7	3.3	184
2006	0.7	8	184
2007	1.2	12.3	184
2008	0.2	2.5	184
2009	0.5	6.2	184
2010	1	9.5	184
2011	1	10	184
2012	1.4	12.4	184
2013	1.1	10.6	184
2014	1	9.3	184

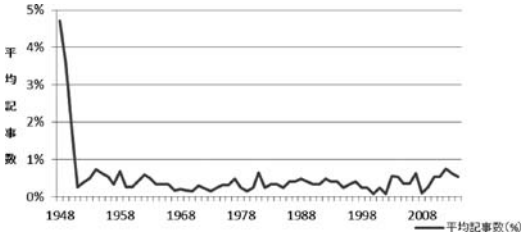

図 3　1 号あたりの総ページ数に占める対象記事数の割合

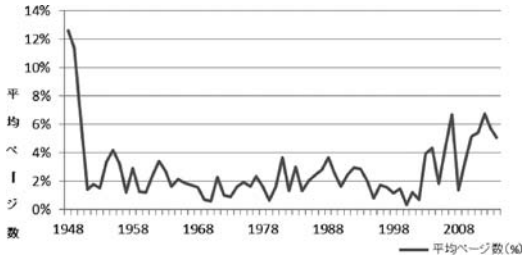

図 4　1 号あたりの総ページ数に占める対象ページ数の割合

表 1 に示すとおり，平均記事数が最も多かったのは，1948 年で 5 件であった。次いで，1949 年の 4.8 件，1950 年の 2.8 件と続き，創刊から 3 年間はさかんに裁縫や手芸に関する記事が登場していたことがわかる。しかし翌 1951 年には 0.5 件と大幅に減少している。その後は 1 件前後で推移してやや持ち直したものの，多い年でも 1958 年の 1.6 件と創刊当初に及ばない状況が続いている。特に 1960 年代後半から 1980 年はじめ，1990 年代後半から 2000 年代はじめにかけては 0.5 件以下の年が目立った。2003 年からは再び 1 件前後で推移，2010 年代は 5 年間連続で 1 件をこえており，件数は増加傾向にある。しかし図 3 からもわかるように，1 号あたりの平均総ページ数に占める記事数の割合は 1951 年以降，微増と微減を繰り返している。件数は増加傾向にある 2000 年代以降でも多少の増加は確認できたが，大幅な変化はなかった。

表 1，図 4 からはページ数の推移が読みとれる。これらによると，平均ページ数が最も多かった年は 1949 年の 15 ページであった。また 10 ページ以上の年は 1948 年から 1950 年，2007 年，2011 年から 2013 年で，創刊当初と 2000 年代後半から 2010 年代に集中していることがわかる。これらの年は平均総ページ数が 200 ページ以下と他の年よりも少ないが，裁縫や手芸に関するページの占める割合は高い結果となった。増減の傾向は記事数

の推移とほぼ一致するが，記事数よりもページ数の方が増加率が高い。創刊当初と 2000 年代後半から 2010 年代の値が近いものになっている。

2.3　記事内容の変化

2.3.1　全体的な推移

表 2，表 3 は調査対象となった記事の内訳を年代別におもな内容ごとわけ，全体に占める割合をまとめたものである。最も記事数が多かったのは編み物の 17% である。特に 1960 年代から 2000 年代の各年代において，編み物が占める割合は最も高かった。また洋裁は全体の 9.3% を占めているのに対し，和裁は 1.6% となっている。年代別での変化をみると，1940 年代は洋裁，和裁ともに 0.6% であったが，1950 年代に洋裁は 2.9% と増加した。しかし和裁は 1950 年代に 0.3% と減少し，1970 年代から 1990 年代，2010 年代は掲載がなかった。ここから，1950 年代を境に洋裁の記事は増加し，和裁の記事は減少したとわかる。ほかの特徴としては 1990 年代まではほとんど記事のなかった刺繍が 2000 年代から増加し，2010 年代は最も高い割合を占めていた。

2.3.2　直線裁ち

調査を進めていくと，「暮しの手帖」では図 5 に示したような直線のみで布を裁って衣服を作る，直線裁ちを大きく扱っていることに気づいた。

直線裁ちの内容は，記事数は全体の 3 番目に多く（表 2 参照），ページ数では 2 番目（表 3 参照）に多い。このように全体の中では大きな割合を占めていた直線裁ちだが，年代別の割合には偏りがある。特に記事数は 1940 年代 1950 年代には最も多くなっていたが，1960 年代からは減少に転じている。

この点について，小泉和子は『洋裁の時代　日本人の衣服革命』2004[5]で次のように指摘している。

> 長い間和服で過ごしてきた日本人にとって，洋裁は別の文化であり，特に裁断は苦手とされていた。

表 2　年代別記事内容と記事件数

年代	編み物	洋裁	直線裁ち	刺繍	人形・ぬいぐるみ	リメイク・修繕	バッグ	和裁	その他
1940 年代	0.30%	0.60%	2.60%	0%	0.60%	0.30%	0.30%	0.60%	3.80%
1950 年代	1.90%	2.90%	2.90%	0.30%	2.20%	1.00%	1.00%	0.30%	5.10%
1960 年代	1.90%	0.60%	0.60%	0.30%	1.60%	1.00%	1.30%	0.30%	5.10%
1970 年代	2.20%	1.00%	0.60%	0.30%	1.00%	0.60%	0%	0%	4.80%
1980 年代	3.20%	0.60%	0.60%	0.30%	1.00%	1.00%	0.30%	0%	7.70%
1990 年代	3.20%	1.30%	0.30%	0.30%	0.30%	1.60%	0.60%	0%	5.80%
2000 年代	1.90%	1.60%	0.30%	1.00%	0.60%	1.00%	1.00%	0.30%	3.80%
2010 年代	2.20%	0.60%	0.30%	2.90%	0.60%	0.30%	0.30%	0%	2.60%
計	17.00%	9.30%	8.30%	5.40%	8.00%	6.70%	4.80%	1.60%	38.80%

表 3　年代別記事内容と掲載ページ数

年代	編み物	洋裁	直線裁ち	刺繍	人形・ぬいぐるみ	リメイク・修繕	バッグ	和裁	その他
1940 年代	0.10%	0.20%	1.60%	0%	0.30%	0.10%	0.30%	0.20%	2.00%
1950 年代	0.70%	2.90%	3.60%	0.30%	1.50%	0.50%	0.50%	0.10%	3.60%
1960 年代	2.00%	0.60%	1.40%	0.70%	1.30%	0.60%	1.10%	0.20%	4.30%
1970 年代	2.80%	0.70%	1.10%	0.50%	0.80%	0.50%	0%	0%	3.30%
1980 年代	3.30%	0.60%	1.30%	0.50%	0.60%	1.00%	0.20%	0%	8.30%
1990 年代	3.10%	0.70%	0.60%	0.30%	0.40%	1.60%	0.50%	0%	4.80%
2000 年代	3.20%	2.00%	0.70%	1.00%	1.10%	1.20%	1.20%	0.50%	5.70%
2010 年代	3.70%	0.80%	0.40%	4.90%	1.00%	0.50%	0.40%	0%	3.70%
計	18.80%	8.60%	10.70%	8.30%	6.80%	6.00%	4.10%	1.10%	35.70%

図 5　直線裁ちのワンピース「美しい暮しの手帖」1 号より[4)]

そこで和裁の手法を生かし，形だけ洋服を作ったのが直線裁ちである。簡単に縫えて手持ちの和服地を再生でき，衣料不足を解決しながら洋装化を進められるとして戦後から着目された。婦人雑誌なども直線裁ちを取り上げているが，最も熱心に取り上げたのは「暮しの手帖」だった。直線裁ちを取り上げた記事は 1950 年代までに集中している。1940 年代のデザインは洋服の形に無理に近づけて素材にも浴衣地や和服地を使っており，調和がとれていない。当時は衣料不足によって新しい生地は手に入らなかった。そのため和服を仕立て直すことが多く，雑誌でもこの状況に対応していた。しかし 1950 年代になると洋服地が出回り，1951 年にはナイロンの生産もはじまった。この状況を反映して直線裁ちの服も 1952 年ごろからは和服の更生ではなく，服地を使うようになってデザインも洗練された。

「暮しの手帖」が直線裁ちを取り上げたのは，着るものがなかった戦後に簡単に自分で作れる服を紹介することが目的だった。「美しい暮しの手帖」1 号の「直線裁ちのデザイン」で裁断とモデルを担当した大橋鎭子は解説で「和服と同じように直線で裁ってあります。だからもう型紙はいりません。…（中略）…浴衣さえ縫える人なら，誰にでも出来ます。」と述べ，4 号の「これが直線裁ちです」でも，「洋裁を知らなくても，浴衣を縫える人なら誰にでも作れる。…（中略）…日本人を生かし，和服地を生かす裁ち方である」と述べている。ここから直線裁ちは型紙がいらないこと，簡単に裁てること，早く作れること，和服地を生かせる特徴があるとわかる。また当時の状況として浴衣は縫えても，洋裁ができる人は少なかったこともわかる。つまり，当時の女性が持つ和裁の技術でできる服が直線裁ちだったのである。

2.3.3　暮しの手帖掲載記事と社会的背景の関係

調査結果をみると，記事数・ページ数が最も多かった期間は 1948 年から 1950 年である。これは戦後の和服から洋服への服装変化が関連すると考えられる。大戦に伴って多くの衣服を失い，既製服が普及していなかった当時にあっては，自分の手で洋服を作る必要があった。戦後の混乱期は，それまで緩やかに進んでいた洋装化の流れに拍車をかけたであろう。しかし，洋裁のできる人は少なかった。その社会状況に対応するため，「暮しの手帖」では，裁縫や手芸に関する記事やページの割合を大きくしたと考えられる。1950 年代を境に洋裁の割合は増加し，和裁は減少していた。直線裁ちを大きく取り上げた時期も 1940 年代から 1950 年代に集中しており，和裁の技術を生かして洋服作りをおこなえるようにした読者への配慮を感じる。

1960 年代以降は記事数，ページ数とも減少しているが，特に 1960 年代後半から 1980 年はじめの大幅な減少は，既製服の普及が関連すると考える。この時期はアパレル産業の成立によって既製服の大量生産と大量販売ができるようになり，既製服が人々の生活に定着した。製造技術が確立したことで，粗雑な既製服が出回ることもなくなった。衣服は作るものから買うものとなった社会の変化に対応し，雑誌でも裁縫や手芸に関する記事やページが減少したと考える。したがってこの時期は，手を動かして何かを作る意識が人々の中で薄れた傾向があるとも考える。

記事数とページ数が増加に転じたのは 2003 年以降で，特に 2010 年代は安定した増加傾向が続いている。またこの時期はページ数の増加の度合いが，記事数よりも大きくなっている。これは作り方を細かく記載するようになったことが関連する。

図 6 は「美しい暮しの手帖」6 号（1949 年 12 月 1 日発行）の「あたたかい部屋靴を作りましょう」，図 7 は「暮しの手帖　第 4 世紀」54 号（2011 年 9 月 24 日発行）の「足元をあたためるルームブーツ」の記事冒頭である。どちらも 3 枚の型紙からなる構成の室内履きであるが，1949 年の記事は 2 ページであったのに対し，2011 年の記事は図 7 に続けて合計 8 ページをさいて細かく作

図 6　「あたたかい部屋靴を作りましょう」の記事 1949 年「美しい暮しの手帖」6 号より[6)]

図 7　「足元をあたためるルームブーツ」の記事 2011 年「暮しの手帖　第 4 世紀」54 号より[7)]

り方を掲載している。このように作り方が詳しくなる傾向はほかの内容の記事でも複数確認できた。読者一般の裁縫技術が稚拙になったことに対応しているのではないだろうかと推測される。

また記事内容の変化については，それまでほとんど取り上げられることのなかった刺繍が，2000 年代から記事数ページ数とも増加している。刺繍は装飾的な性格が強く，施さなくとも使用するうえでは問題のない技法である。近年 2000 年代以降は，手を動かして何かを作ることが，趣味として再び注目がされているといえよう。

3. 手仕事の今後とエシカル消費

地球環境や社会貢献に配慮した商品やサービスを選んで消費するエシカル消費は，日本にも浸透しはじめている。倫理を意識する考えが広がっていることは，新しい変化ともいえる。浸透の背景を明らかにすることで，手仕事の今後が見えてくるのではないかと考えた。

3.1　エシカル消費とは

以下は宮木由貴子の「震災で高まる「エシカル消費」への意識」2011[8)]からの引用である。

> 「エシカル（ethical）」は，「倫理的・道徳的」との意味であり，「エシカル消費」は直訳すれば「倫理的な消費」となる。これは，商品・サービスの価格と自分への効用という単純な視点からみたコスト・パフォーマンスではなく，地球環境や社会貢献といった，より広い視野での効用を求める消費スタイルである。具体的には，エコロジーやオーガニック（有機栽培），フェアトレード（公正貿易：発展途上国などで作られた農作物や製品を適正な価格で取引し，不当な搾取を防止するもの）などであり，これまでも注目されてきた考え方である。エシカル消費において，消費者は単に商品やサービスを入手するだけではなく，それらを購入することによる派生効果や，将来へのインパクトにまで目を向ける。換言すれば，個人レベルでのコスト・パフォーマンスだけでなく，よりマクロ的かつ利他的観点からみたコスト・パフォーマンスまで問うのがエシカル消費である。

エシカル消費は価格やデザインだけでなく，商品やサービスなどの，外見からはみえにくい部分にも配慮した消費であるといえる。

この考えを衣生活に反映した取り組みがエシカル・ファッションである。以下は内村理奈の「エシカル・ファッションにみる今日的課題」2012[9)]の一部をまとめたものである。

エシカル・ファッションは 2004 年にパリで誕生した。そのはじまりとなったのがエシカル・ファッション・ショー（Ethical Fashion Show）である。エシカル・ファッションとは人間と環境に対して敬意を払い，次世代のために地域に固有の文化や技術を引き継ぐものである。そこではファスト・ファッションの抱える問題を解決すること，環境問題に配慮すること，地域社会の文化や技術を守ることを重視している。

エシカル・ファッション・ショーには「人権」「環境」「地域固有の技術」を尊重した行動憲章がある。「人権」の項目では国際労働機関の協定の順守と共同体発展のための永続的投資・知的所有権の尊重，「環境」では環境負荷を抑えた素材と物質の使用，「地域固有の技術」ではこれらの可視化と永続・保全を掲げている。基準を満たしたものには，図 8 の認証マークで評価をおこなっている。(1) はオーガニックな素材を用いたもの，(2) は

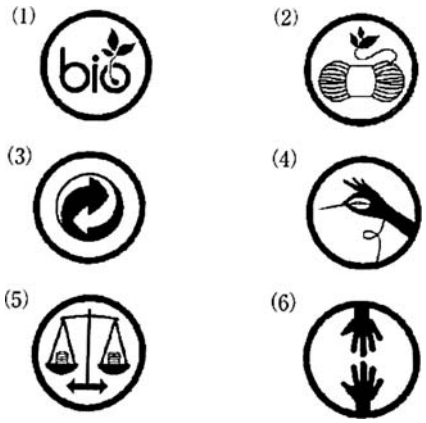

図 8　エシカル・ファッション・ショーの認証マーク
出典：内村理奈／「エシカル・ファッションにみる今日的課題」／家計経済研究／95 巻／P.42/2012

自然素材を用いたもの，(3) はリサイクルしているもの，(4) は地域固有の伝統技術を用いたもの，(5) は公正な取引と対価で取り交わされたもの，(6) は社会援助に投資したものを意味している。このようにエシカル・ファッションは自然環境だけでなく，人権問題・労働問題・経済格差にも配慮した活動である。それは現代社会の問題をファッション界から解決していく社会運動ともいえる。

3.2　日本における浸透の背景

石橋仁美は「「倫理」が拓く新市場」2012[10]で「2008 年のリーマン・ショックを機に米国にも「エシカル消費」という発想が広がった。」と述べ，アメリカでエシカル消費が浸透した背景にはリーマン・ショックが関連していると指摘する。

日本においても社会に大きな影響を与える出来事が起きたことで消費者意識が変化し，エシカル消費が浸透した。坂口昌章は「大震災後のファッションビジネス－地震を契機に，日本の繊維産業の構造変化が加速する－」2011[11]で「これまで，多くの消費者は「安くて良い商品」に飛びついていた。欧米の消費者が環境問題，人権問題等に関心が高いのに対し，「日本の消費者は社会的意識が低い」「安くて品質が良い商品ならいい」とも言われてきた。しかし，大震災後の消費者の行動を見ると，利己的な買い占めが見られた反面，支援としての消費という考え方も定着しつつあるのを感じる。「困ったときはお互いさま」という日本人的な感情が，消費行動にも反映されているのである。」と述べ，東日本大震災をきっかけに日本の消費者意識が変化したと指摘している。これは利己的満足を求める消費から倫理的満足を求める消費へと人々の関心が変化したともいえる。

また宮木由貴子も「東日本大震災後の女性の消費行動：1 都 3 県在住女性の震災後 1 か月と現在の消費行動」2013[12]で「東日本大震災は，災害に対する各種備えや対策についてのみならず，全般的な消費スタイルや消費情報の在り方，さらに消費行動における責任の所在についても多くの課題を浮き彫りにしたといえる。」と述べている。ここからも震災によって消費者意識が変化したことがわかる。

3.3　東北コットンプロジェクト

東日本大震災によってはじまったエシカル・ファッションの取り組みに東北コットンプロジェクトがある。以下は宮川真紀の『東北コットンプロジェクト』2014[13]の一部をまとめたものである。

東北コットンプロジェクトは東日本大震災で津波の被害を受けて稲作ができなくなった農地に綿を植え，それを綿製品として販売することで被災地の復興支援・雇用創出をおこなっている。綿は塩害に強いとされているが，日本ではそのほとんどを輸入に頼っており，農作物としても認められていない。その綿の栽培をはじめたのは，震災で大きな被害を受けた宮城県の農業生産法人であった。2011 年は仙台市若林区の荒浜と名取市で，2013 年には東松島市でも栽培されるようになった。日本での綿栽培は技術が確立していないために天候や雑草，害虫の影響を受けやすい。プロジェクトでも安定した収穫量の確保には至っていないのが現状である。しかし綿花栽培の可能性を広げようと，栽培方法の工夫や品種の研究が進められている。

プロジェクトへの継続的な支援をおこなっているのが，アパレル業界を中心とした企業と団体である。現在では 82 もの企業と団体が携わるようになった。収穫した綿で企業は独自の商品を作り，東北コットン商品を示す図 9 のタグをつけて販売する。初年度は販売する商品の種類を全体で統一したが，以降は企業ごとに T シャツやジーンズ，タオルといったオリジナルを東北コットン商品として販売している。東北コットンを全面的にアピールするか，あまり打ち出さない商品を作るか，企業の方針はそれぞれである。しかし継続的な支援をおこなっていくという思いは共通しており，撤退する企業や団体はほとんどなく新規加入も増えている。中には NPO を通じてプロジェクトを世界に発信し，「服を着ること

図 9　東北コットン商品を示すタグ　東北コットンプロジェクト HP より[14)]

が支援になる」というメッセージを広めている企業もある。プロジェクトは復興支援やビジネスだけでなく，生活や社会そのものを見直し，将来を見据えた活動につながろうとしている。

4. まとめ

日本で日常着の洋装化が加速したのは第二次世界大戦直後である。女性たちが洋服を作ったことで洋服は生活に根づいた。当時の裁縫は自らの手を動かすことで，家庭生活を営む家事的なものだった。1950 年代になると既製服が流通したが，粗雑さが目立ったために普及しなかった。しかし 1970 年代前半にアパレル産業が確立すると品質のよい既製服が大量生産できるようになり，1980 年代には既製服が定着した。

洋装化と既製服の普及は雑誌「暮しの手帖」の内容にも変化を与えた。洋装化が進んだ終戦直後は，裁縫や手芸に関する記事とページの数が多かった。中でも実用性のある，和裁の技術を生かして洋服を作る直線裁ちを扱う割合は高かった。しかし既製服が普及して衣服が作るものから買うものへと変化すると，これらの記事やページは大幅に減少した。これは手を動かして何かを作り出す必要性が減少したことを表しているであろう。現在はやや増加傾向にあり，特に 2010 年以降は安定して高い割合が続いている。装飾的な性格の強い刺繍を扱う割合が高くなり，手仕事が家事的なものから趣味的なものへと変化したことがわかる。

とくに近年は，地球環境や社会貢献に配慮した商品やサービスを選んで消費するエシカル消費，この考えを衣生活で実践するエシカル・ファッションが日本に浸透してきた。これらが日本に浸透した背景には東日本大震災が関連している。この出来事により日本の消費者意識は変化し，倫理を尊重する風潮が広がった。震災をきっかけにはじまった，エシカル・ファッションの取り組みのひとつに東北コットンプロジェクトがある。「服を着ることが支援になる」と社会に発信するこのプロジェクトは，生活や社会そのものを見直す活動にもなっている。

以上のように日本の女性が家庭生活でおこなう手仕事の変遷には戦後の洋装化と既製服の普及の影響が大きい。これらの変化は教育や雑誌の内容にも反映していた。現在の女性の手仕事は，「家事」ではない。自らの手で何かを作り出すことで，楽しさや喜びを感じる趣味的なものである。東日本大震災によって日本に浸透しはじめた倫理的満足を求めるエシカル消費は，今後の手仕事に新たな価値を見出す起点になると感じる。

注

1）津野海太郎『花森安治伝　日本の暮しを変えた男』2013　P.10
2）暮しの手帖社　https : //www.kurashi-no-techo.co.jp/company
3）暮しの手帖社　https : //www.kurashi-no-techo.co.jp/list/honshi
4）暮しの手帖社「美しい暮しの手帖」1 号 1948　P.7
5）小泉和子『洋裁の時代　日本人の衣服革命』2004　P.154-164
6）暮しの手帖社「美しい暮しの手帖」6 号　1949　P.24-25
7）暮しの手帖社「暮しの手帖　第 4 世紀」54 号　2011　P.18-25
8）宮木由貴子「震災で高まる「エシカル消費」への意識」2011　P.38
9）内村理奈「エシカル・ファッションにみる今日的課題」2012　P.38-45
10）石鍋仁美「「倫理」が拓く新市場」2012　P.19
11）坂口昌章「大震災後のファッションビジネス－地震を契機に，日本の繊維産業の構造変化が加速する－」2011　P.50
12）宮木由貴子「東日本大震災後の女性の消費行動：1 都 3 県在住女性の震災後 1 か月と現在の消費行動」2013　P.27
13）宮川真紀『東北コットンプロジェクト』2014
14）東北コットンプロジェクト　http : //www.tohoku-cotton.com/report/130426.html

参考資料一覧

図書

- 石鍋仁美／「「倫理」が拓く新市場」／CEL： Culture, energy and life／98 巻／P.17-20／2012. 1
- 内村理奈／「エシカル・ファッションにみる今日的課題」／家計経済研究／95 巻／P.38-45／2012
- 木下明浩／「1980 年代日本におけるアパレル産業のマーケティング（1）」／經濟論叢／146 巻 2 号／P.67-85／1990
- 小泉和子／『洋裁の時代　日本人の衣服革命』／農文協／2004. 3
- 坂口昌章／「大震災後のファッションビジネス－地震を契機に，日本の繊維産業の構造変化が加速する－」／繊維トレンド／88 巻／P.47-52／2011. 5
- 田中十一子／「戦後の家庭科教育の変遷：被服教育を中心として（第 1 報）」／園田学園女子大学論文集／26 巻／P.301-313／1992. 1
- 田中十一子／「戦後の家庭科教育の変遷：被服教育を中心として（第 2 報）」／園田学園女子大学論文集／27 巻／P.183-198／1993. 1
- 田中十一子／「戦後の家庭科教育の変遷：被服教育を中心として（第 3 報）」／園田学園女子大学論文集／28 巻／P.161-177／1993. 10
- 田中十一子／「戦後の家庭科教育の変遷：被服教育を中心として（第 4 報）」／園田学園女子大学論文集／29 巻／P.179-203／1994. 12
- 津野海太郎／『花森安治伝　日本の暮しを変えた男』／新潮社／2013. 11
- 宮川真紀／『東北コットンプロジェクト』／タバブックス／2014. 6
- 宮木由貴子／「震災で高まる「エシカル消費」への意識」／Life design report／200 巻／P.8-40／2011
- 宮木由貴子／「東日本大震災後の女性の消費行動：1 都 3 県在住女性の震災後 1 か月と現在の消費行動」／Life design report／206 巻／P.16-27／2013
- 村田仁代／「日本の現代衣生活における既製衣服定着化に関する一考察」／日本服飾学会誌／7 巻／P.9-17／1988. 5

雑誌

- 「美しい暮しの手帖」1-21 号／暮しの手帖社／1948-1953
- 「暮しの手帖」22-100 号／暮しの手帖社／1953-1969
- 「暮しの手帖　第 2 世紀」1-100 号／暮しの手帖社／1969-1986
- 「暮しの手帖　第 3 世紀」1-100 号／暮しの手帖社／1986-2002
- 「暮しの手帖　第 4 世紀」1-70 号／暮しの手帖社／2002-2014

ホームページ

- 暮しの手帖社　https : //www.kurashi-no-techo.co.jp/（2014/10/12 アクセス）
- 東北コットンプロジェクト　http : //www.tohokucotton.com/（2014/10/30 アクセス）

（2015 年 11 月 9 日受理）